選評

審査委員長 嶋 津与志

多様化顕著「個性」競う

沖縄市社会福祉協議会が「福祉と文化の出会う創造的な風土づくり」をめざして本賞を設けてから今回で第20回の成年を迎えた。毎回60編前後の応募作が競い合い、沖縄児童文学の登竜門として定着しつつある。

今回の応募作品も60編に達したが、内25編が初応募で、数回の挑戦を続けている熱心な応募者も多い。

1次審査を通過した7編の作品を、第2次審査委員の又吉栄喜、岸本マチ子、嶋津与志の3人が慎重に審査したが、総じて題材もスタイルも多様化の傾向が顕著で、巧拙の差というよりも個性の競い合いという観があった。

「どくむしプゥ」（大浜弘）はリズム感のある達者な文体で読ませるし、表記法にも工夫の跡が見られるが、うそつきの世界が毒虫によって滅ぼされるという勧善懲悪的なストーリーでは訴えるものが弱い。

「座敷わらしとキジムナー」（根間郁乃）は大震災で東北から避難してきた座敷わらしがキジムナーと出会うという設定はドラマチックな展開を期待させたが、土産にアカバナーをもらって帰るだけでは物足りない。

「夏のできごと」（原國奈津紀）は、文章も構成もよく、思春期の悩みをかかえた少女が空想の世界へ迷い込んでいく心象風景もよく描けていて納得できるが、シロツメグサの花にこだわりすぎるのがいささか少女趣味的で興ざめになる。

「動物たちの音楽祭」（内間弘）は、さまざまな動物たちが出場するのど自慢大会でチームワークと猛練習で混声合唱チームが優勝するまでの物語だが、登場動物たちの造形描写が浅く、単調な筋書きに終わって印象が弱い。

奨励賞の「セーグヮー村の星祭り」（野原せい）も昆虫を擬人化した相撲大会の話。虫たちの体形や生態を相撲の取り口に投影させて爽やかなユーモアを醸し出している。観察力と描写力が評価されて入賞を獲得した。

優秀賞の「あおぞら将棋クラブ」（もりしたかずき）は、公園の露天将棋で出会った大人たちから将棋の戦法を学んでいくうちに人生哲学のようなものを吸収して成長していく将棋好きの少年の話だが、もう少し将棋そのもののおもしろさを描いてほしかった。

大賞の「校長室の秘密」（金城毅）は、小学校の教室で起こった小事件をめぐる一種の友情物語だが、現代世相を反映したリアリティーがあり、登場人物の描き方や、結末のどんでん返しの意外性など、短編小説としても通用する。

以上の入賞3作とも甲乙つけがたく選者の意見も拮抗したが、完成度の高さという観点から「校長室の秘密」を大賞とした。